

第三十四回和辻哲郎文化賞 学術部門受賞作

納富 信留 著『ギリシア哲学史』（2021年3月20日刊 筑摩書房）

納富 信留 のうとみ・のぶる

東京大学大学院人文社会系研究科教授

1965年（昭和40年）3月15日 56歳 東京都新宿区出身

専門は、哲学・西洋古典学

1987年3月、東京大学文学部卒業。1990年3月、東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了。1995年10月、ケンブリッジ大学大学院古典学部博士課程修了（Ph.D.取得）。1996年10月、九州大学文学部講師。1998年4月、同 助教授。2002年4月、慶應義塾大学文学部助教授。2006年3月、オランダ・ユトレヒト大学訪問研究員（～2007年9月）。2008年4月、慶應義塾大学文学部教授。2016年4月、東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）。

主著に、『対話の技法』（笠間書院、2020年）、『世界哲学史』全8巻+別巻（共編著、ちくま新書、2020年）、『プラトン哲学への旅 —エロースとは何者か—』（NHK出版新書、2019年）、『哲学の誕生 —ソクラテスとは何者か—』（ちくま学芸文庫、2017年）、『プラトンとの哲学 —対話篇をよむ—』（岩波新書、2015年）、『ソフィストとは誰か?』（ちくま学芸文庫、2015年；人文書院、2006年、サントリー学芸賞）、『プラトン 理想国の現在』（慶應義塾大学出版会、2012年）、『ソフィストと哲学者の間 —プラトン『ソフィスト』を読む—』（名古屋大学出版会、2002年）、*The Unity of Plato's Sophist: Between the Sophist and the Philosopher* (Cambridge University Press, 1999)など。ほか、編著・訳書多数。

受賞のことば

古代ギリシアは哲学の故郷であり、今日も尽きせぬ魅力と刺激を与えてくれる対話相手です。この度、拙著に栄えある学術賞を授与いただき、誠に光栄に存じます。独自の哲学・学術的貢献に贈られるこの賞に、「哲学史」という一種の概説書が選ばれるのは異例のことかと思えます。しかし、これまで人類が積み重ねてきた思索を世界哲学の視野で振り返り、根源的な問いに私たち自身も真剣に向き合いながら徹底的に考える哲学が、混迷といわれる現代には必須です。その鍵となるのは、明治以来日本の哲学者が基盤としてきた西洋古代の哲学を、最新の知見をふまえて原典から読み解く総合的な試みだと感じてきました。和辻哲郎もそのように古代に目を向けた一人でした。3世紀にわたる哲学誕生の時期を論じた本書が広く皆様にお読みいただけることが、これから日本で展開する哲学にとって大きな意味をもつはずだと信じております。ありがとうございました。

《選考委員評》

野家 啓一

掛け値なしの力作である。タイトルが『ギリシア哲学史』とシンプルなだけに、ガスリーの大著をはじめ同題の先行著作や類書には欧語・邦語を問わず事欠かない。それらと肩を並べ、さらに凌駕するためには、著者には透徹した史観と該博な知識はもとより、独自の構想と叙述の工夫が要求されるはずである。納富信留氏はそのいずれの課題をも周到な準備と綿密な方法論によってクリアされ、ここに日本人の手になる浩瀚なギリシア哲学史を完成させた。今回の受賞にふさわしい達成と言わねばならない。

納富氏は叙述の枠組みを確定するに当たって、従来の「ソクラテス以前」および以後という通例の時期区分を廃し、「初期ギリシア哲学／古典期ギリシア哲学／ヘレニズム哲学／古代後期哲学」という四期区分を提唱する。これによってニーチェやハイデガーに見られるギリシア観、すなわち「ソクラテス以前の哲学者の荒削りな言葉に哲学の原石を見ようとするロマン主義的な傾向」は背景に退くことになる。次に氏は従来の学派や学統を前面に出した系譜学的叙述ではなく、個々の哲学者の思索の跡を丹念にたどり直す列伝体の記述方式を採用する。これによってグループとしてまとめられ個々の顔が見えにくかった哲学者たちの顔立ちと思索の輪郭が明確になり、さらに彼らの間の影響作用史や間テキスト性が浮彫りにされ、綺羅星のごとき哲学者たちの布置（星座）が可視化されることになった。

その上で、氏はギリシア哲学史が単なる歴史叙述ではなく、哲学の営みそのものであることに注意を促す。なぜなら、ギリシア哲学はいわゆる哲学の「起源」に留まらず、根拠への問いを問う「始まり」であったからである。それゆえギリシア哲学史を振り返ることは、「何か？」という始まりの問いを反復することにほかならない。その意味で、ギリシア哲学史は文献学の域を越えて、哲学の「始まり」を追体験することなのである。

読者の中には本書がギリシア哲学史を標榜しながら「アカデメイアとアリストテレス」で巻を閉じていることを訝しく思われる向きもあろう。だが、本書がカバーするのは四期区分の前半期にすぎない。後半期については「続巻で論じたい」との著者の言葉である。その完結の一日も早からんことを期待しつつ選評を終えたい。

なお、候補作として最後まで残った今橋映子氏の大著『近代日本の美術思想』は明治大正期の美術批評家岩村透の業績を忘却の彼方から呼び戻した文字通りの労作であり、受賞作とは紙一重で次点に留まった優れた作品であることをここに付け加えておきたい。

思えば、現代の日本人が古代ギリシアの哲学史を概観するなどということは、殆ど不可能な壮举と思われよう。しかしそれを受賞作『ギリシア哲学史』は、日本のギリシア哲学研究の長い伝統を踏まえ、また著者・納富信留氏が、博士号を授与されたケンブリッジ大学や、会長として牽引されたプラトン哲学会などの世界的な研究ネットワークに目配りしつつ、しかも著者独自の的方法論で達成しているのである。その上、本書は単に歴史学的文献学的な分析を超えて、古代の哲学者たちが問うた問いと渉り合い、今ここでの哲学的思索を敢行することへと収斂していく。

独自の的方法是幾重にも巧まれているが、その一つに、従来の学派による分類ではなく、個々の哲学者ごとにその独自性を浮き立たせる手法がある。これによって哲学者の個性と相互の影響関係、後代への影響などが、より明確化される。例えばソクラテス対ソフィストというプラトンに由来する対決図式から自由になって、プロタゴラス、ゴルギアス等のソフィストたちとソクラテスが並列して時代の思潮の中で読み解かれる。従来ヘレニズム哲学に分類されていたシノペのディオゲネスが、古典期のプラトン、アリストテレスの同時代人として比較照射される等々。各哲学者の後代への影響史は、32の章末それぞれに「受容」という一節を設けて、現代に至るまで概観する周到な叙述で簡潔に纏められる。

しかしそうしたフィロロジカルな手続きは、著者にとってフィロソフィカルな思索の現場に辿り着くための単なる前提に過ぎない。影響史の二次文献よりも個々の哲学者の一次文献を重視し、それらを丹念に読み解く作業の積み重ねのなかで、哲学とは、人間とは、あるいは理性とは何かといった本質的な問いが問い拓かれて行く。なかならず、始まりとは何かについて焦点を合わせるなら、それは、現に明らかに見えているものの根底にある、見えないものへと至ろうとする思考だとされる。ギリシアで哲学が始まったとはどういうことかを問うことで、時代を超えた普遍的な哲学の営みが、全体として姿を現すことが目指される。我々がそこで生きている宇宙の存在とその根拠は「何か？」を問うことで、宇宙が新たな相貌で立ち現れ、「無限」や「ロゴス」や「ある」といった言葉によって、世界の意味が新しく生み出される。哲学のその始まりの問いを今ここに自ら問い直し、展開する。そうしたのっぴきならない哲学の営みが、原初の哲学史との対話のなかで敢行される、その現場の開陳によって、読者ひとりひとりがまたこの哲学の営為へと誘われるのである。

フィロソフィーとフィロロジーの見事な統合として一つの金字塔が、納富氏によってここに打ち建てられたことを、心から慶びたい。

なお今年の学術部門には、65篇の応募作があったが、水準の高い作品が多く、豊作の年であった。中でも今橋映子氏の上下巻から成る大著『近代日本の美術思想』は、全集もなく忘れられがちだった明治後期から大正初期の美術批評家・岩村透の仕事を、断簡零墨に至るまで博搜して、しかも大逆事

件等の言論統制下に如何に美術ジャーナリズムやアーツマネイジメントを展開したかを浮き彫りにした、大変な御労作であった。付記して、その意義を喧伝したい。

黒住 真

今回の選考では、諸分野の優れた達成ともいべき研究を読ませていただいた。ここでは私自身の心に残った三冊の候補作を取り上げさせていただく。いずれの作品も場面は異なるものの、和辻哲郎が求めた「文化」の学問的把握にとって大きな意義を有している。

納富信留氏の『ギリシア哲学史』は、哲学という真理を目指して理性的な対話により普遍性を求める知的営みが古代ギリシアに出現したとする。前半期のポリス社会の哲学（初期ギリシア哲学、古典期ギリシア哲学）と後半期の広域王国・帝国の哲学（ヘレニズム哲学、古代後期哲学）を都合四期に区分し、本書はその前半期を扱う。現在の研究の諸相と水準、新たな資料の発見を踏まえた叙述が展開されており、当該分野の哲学史研究に最も相応しい理解を示すきわめて優れた書物である。

その上で私はさらに期待を持った。それは、この区分前半の知的営為（哲学）の背景・前提であり、区分後半に繋がるものかもしれない点である。例えば F.M.コンフォード『宗教から哲学へ：ヨーロッパ的思惟の起源の研究』（原著 1931）は哲学をダイモーンからの理性の働きがあり、それがヘレニズム以後にも見出される、と述べている。こうした点、区分後半の次著に見えてくるかもしれない。かかる期待を与えて下さった作品でもある。

その課題にも関係するだろうが、カント哲学は『判断力批判』で感情をも含む感性的ゲシュタルトを形成する能力として構想力を捉えている。この点、小田部胤久氏の『美学』は具体的記述に踏み込んで、この批判書の詳細な把握を目指しており、ギリシア哲学との関係にも触れる。ここで触れられた論点を「美学」だけでなく文化哲学的に把握するならば、和辻自身の「文化史」や「芸術史」、また和辻賞の先行受賞作である木村敏氏の V.ヴァイツゼッカー論、佐藤康邦氏のカント論、松井裕美氏のピカソ論といった業績の基盤をも示すものと言える。そこには西欧流の狭い論理からは見えにくくなっているが、むしろ日本では根強い流れとなつて伏流しているものがあるのかもしれない。

その見出すべき伏流水を発見したのが、今橋映子氏の『近代日本の美術思想 美術批評家 岩村透とその時代 上下』である。大日本帝国の周縁部にあった知識人たちの美術批評、「大逆事件」をめぐる初期社会主義、ユニテリアン、森鷗外、ウィリアム・モリス、それらはどう在ったのか——これまで隠されていた重要な場面が本書により具体的に浮き彫りにされる。美術思想のみならず、社会論・経済論としても大きな意義のある研究であり、マルクス主義が表立つ以前の環境的なコモン（共有材）論が捉えられている。事件によって消されたもの、日本近代の文化史にとっての枢要な焦点を、本書

は具体的な資料に基づいた丹念な分析によって示している。これは読者に手渡された贈り物でもあり、同時に課題でもある。

私がまず評価するのはむろん納富氏の「ギリシア哲学史」である。が、さらに文化方法としては小田部氏の立論が参考になろうし、近代日本文化の自己批判としては今橋氏の美術批評が消えた視点を見せてくれる。これらを参考にしながら、さらに考え進んでいきたいと思う。